

科目名	宗教哲学特講	担当者	イシハマ 石浜 ヒロミチ 弘道	期間	通年	単位数	4
-----	--------	-----	-----------------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>人類の歴史と共に存在し続けてきた宗教，それはある意味で私たちが幸せに生きるために不可欠のものであった。しかし反面，宗教は不確かなものを信じるゆえに，独断や排他性に陥りやすい傾向にあった。そこで，宗教の世界を哲学的に考察することで，その特徴と限界を明確にする。さらに，宗教のあるべき姿を探求することで，その客観性・普遍性を目指したい。</p>		
到達目標	<p>なぜ人間には宗教が必要であるのか。それは現代の社会にとってどのような意味があるのか。神的存在を信仰することによって生じるドグマ化を避けるためにはどのような哲学的吟味が必要か。これらの点を明らかにすることをその到達目標にする。</p>		
学修方法	<p>学修の方法は，基本的には提示されたテキストを丹念に読んで，その内容を味読すること。同時に宗教には独自の体験が必要であることから，その基本となる聖書や仏典に触れておくこと。また可能であればキリスト教や仏教の開催する各種修行・行事・講演会等に参加することが望ましい。</p>		
スケジュール	<p>前期：教材1のリポート課題(1)の草稿は7月末，課題(2)は8月末を目処に提出する。取り上げる題材については，記載の参考書等を利用し内容を正確に理解することが望ましい。いずれの課題も9月中旬までに最終稿を提出する。</p> <p>後期：教材2のリポート課題(1)の草稿は11月中旬，課題(2)は12月中旬を目処に提出する。取り上げる題材については，記載の参考書等を利用し内容を正確に理解することが望ましい。いずれの課題も平成30年1月上旬までに最終稿を提出する。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	リポート	60%	リポートが課題通りに的確に書かれているか。
	平常評価	40%	再提出リポートへのコメントを正確に理解し，それに沿って修正した内容となっているか。
履修者への要望	<p>哲学の書物はその哲学的な意義だけではなく，哲学的な思索を深める点でも有効なので，テキストの内容を一字一句，しっかりと吟味しながら読解することが望ましい。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	<p>(1) 著者名： カント 教材名： 『実践理性批判』(岩波文庫, 1979年) ISBN:978-4-00-336256-3 940円+税</p> <p>(2) 著者名： 鈴木大拙 教材名： 『日本的靈性 完全版』(角川学芸出版, 2010年) ISBN:978-4-04-407603-0 933円+税 (岩波文庫も可 ISBN:978-4-00-333231-3 780円+税)</p> <p>(1)カントは道徳の世界が目ざす究極的な目標として「最高善」を語り、それを基礎づけるものとして神の存在を要請することで、道徳と宗教とのかかわりを論じている。 (2)鈴木大拙は「靈性」という視点から日本の宗教的世界を明らかにし、宗教の靈的本質が禅や浄土系の宗教にあることを論じている。</p>
参考図書	<p>石浜弘道『カント宗教思想の研究』(北樹出版, 2002年) ISBN:978-4-89-384875-8 3,800円+税</p> <p>竹田青嗣『完全解説・カント実践理性批判』(講談社, 2010年) ISBN:978-4-06-258488-3 1,600円+税</p> <p>竹村牧男『西田幾多郎と鈴木大拙』(大東出版社, 2004年) ISBN:978-4-50-000699-1 4,400円+税</p>
履修上のポイント	<p>(1)では、テキスト(教材)の各編を熟読し、その内容を上記の参考図書を利用して考察。しかしカントに初めて触れる人はかなり難解なので、小牧治『カント』<人と思想シリーズ>清水書院、等の入門書で基本的な知識を得ておくこと。</p> <p>(2)は仏教的な内容の書物なので、同様の知識を新書レベルの入門書(例えば、渡辺照宏『日本の仏教』, 三枝充恵『仏教入門』共に岩波新書)で得ておくこと。</p>
レポート課題 1	<p><①か②のどちらか一つを選択></p> <p>①『実践理性批判』第1編『分析論』において、カントはその中心に「定言命令」という形で道徳法則を述べているが、その内容となぜ「命令」なのかを述べなさい。</p> <p>②『日本的靈性』において、大拙が語る「靈性」はとはどのようなものであるかを神道や平安仏教と比較しながら述べなさい。</p> <p>留意点：テキスト理解だけでなく参考図書により筆者の思想的全体像を捉えること。</p>
レポート課題 2	<p><①か②のどちらか一つを選択></p> <p>①『実践理性批判』第1編『分析論』でカントの道徳論は完結するが、第2編『弁証論』を展開し、そこで神の存在を要請という形で述べ、道徳と宗教的世界との接点を語るが、この『弁証論』はなぜ必要なのかを要請や幸福との関連で述べなさい。</p> <p>②『日本的靈性』において、大拙が語る「靈性」は法然においてどのように体得され実践されていったかを第3編を中心に述べなさい。</p> <p>留意点：テキスト理解だけでなく参考図書により筆者の思想的全体像を捉えること。</p>

基本教材 2	
教材の概要	<p>著者名： 石浜弘道 教材名： 『靈性の宗教』(北樹出版, 2010年) ISBN:978-4-77-930249-7 2,500円+税</p> <p>宗教哲学の主要テーマである宗教の本質とは何かを考察する中で、20世紀末から注目すべき傾向が現れた。それは私たちに遍く内在するスピリチュアリティ(靈性)という能力とその働きである。この能力は伝統的な宗教の領域だけではなく、精神世界といわれる広義の宗教的領域においてもその核とみなされている。そこで教材では、スピリチュアリティをその中心のテーマとしたキリスト教神学者 Paul Tillich の思想をベースとし、キリスト教的観点からその内実を展開する。</p>
参考図書	<p>ティリッヒ『信仰の本質と動態』(新教出版社, 2000年) ISBN:978-4-40-034056-0 1,000円+税</p> <p>ヤスパース『神の暗号』(理想社)</p> <p>または『哲学入門』(新潮文庫, 2005年) ISBN:978-4-10-203601-3 490円+税</p> <p>鎌田東二『神道のスピリチュアリティ』(作品社, 2003年) ISBN:978-4-87-893593-0 1,900円+税</p>
履修上のポイント	<p>テキストを熟読すると同時に、スピリチュアリティを中心テーマとする上で宗教体験(ティリッヒのいう靈の現臨)が重要となるゆえ、各自宗教的世界に触れることが望ましい。たとえば、各種の宗教行事への参加や宗教芸術の鑑賞等。</p>
レポート課題 1	<p>「象徴」, 「暗号」, 「啓示」の中から二つの言葉を選び、宗教に対するアプローチの特徴を述べなさい。</p> <p>留意点：テキストの1章, 2章1節を熟読すること。レポート作成に際してはティリッヒやヤスパースの上記資料を可能な限り読んでおくこと。</p>
レポート課題 2	<p>靈性とは何か、またそれはどのような領域に働き、どのような意味があるのかを、宗教の普遍性の視点から述べなさい。</p> <p>留意点：テキストの第1章, 第3章を中心に考えること。</p>